

本ペンクラブには頭文字にOがつく会員が多い。そのうちの一人Oのさんが先日亡くなった。「何でも書こう会」の名司会者であり、名批評家でもあった。彼を追悼してOさんと曰く、「OGさん」Oさんの書いたもので一番面白いのは『泥酔記』だと言われた」と。まったく同感である。仕事先での数々の泥酔・昏睡失敗談のなかに、Oさんの愛すべき人柄が読み取れる。

翻って自身の経験を振り返ると、自宅など気の置けない折には少量の酒量でも心地よく酔いが回り、直ぐに昏睡状態に陥った。対して外では泥酔よりも嘔吐に悩まされてきた。「酒を飲むのは良いが、飲まれるな」と青年期に教わった教訓もあり、駅構内や路上で嘔吐の跡や泥酔者を見かけると嫌悪感を催すのだが、当人はその時どうしようもないのだ。

嘔吐の最初の記憶は、入社一年目に酒豪の上司について発電所の性能試験に出張した折である。無事に性能が出たので祝杯を挙げ過ぎ、慌てて洗面所でゲロゲロ。その後も課の団体慰安旅行などでは時々皆に隠れてトイレのご厄介になった。

中国へ使節団の代表として出張した時も参った。何回も何回も強い酒で乾杯を繰返し、杯を下に向け飲み干したことを示さなければならぬ、嘔吐の兆しがいつ現れるかとヒヤヒヤのし通しであった。それでも屋内ならばまだ良い。

問題は酔い過ぎた後の帰りである。叢などが脇に有る路上などは暗闇にまぎれて用を足せるが、揺れる混雑した電車が最も難物だ。次の駅に止まるのを待って慌ててホームに出て、トイレを探す余裕もなく革の通勤鞆を開き、その中へ吐いた覚えもある。中の書類をはじめ鞆も嫌な臭いがついて使い物にならなくなったが、以来ビニール袋を常に忍ばせておく習慣がついた。

体質的に血中アルコール濃度の閾値が昏睡と嘔吐でどちらが低いかで、症状は随分違ってくる。さて『泥酔記』に対抗し、題名を何とつけるか。『嘔吐記』ではサルトル風で哲学的過剰さ。ゴロならぬゲロ合わせて『蛙鳴記』としよう。